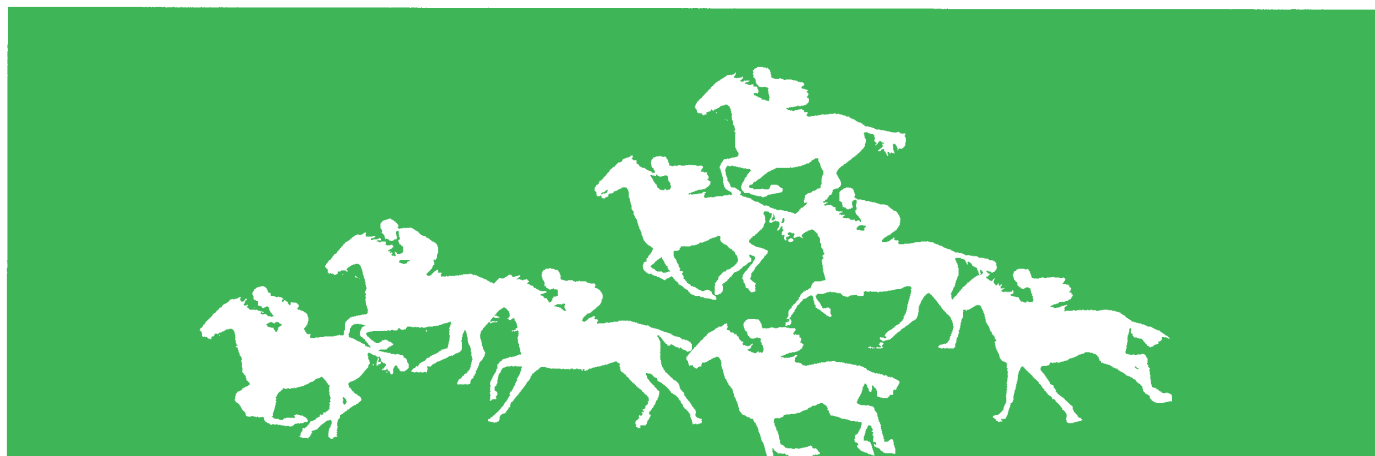


BTC

2019年114号

ニュース



CONTENTS ●

ページ

- ① た・づ・な 1
これからの馬産地日高に求められるもの
- ② 調査研究 2
若馬における中手近位掌側部の傷害
- ③ 競馬の箱馬車 5
BTC 調教場がもたらしたもの
- ④ 施設巡り BTC 利用牧場の紹介 8
シュウジデイファーム
- ⑤ 研修生のページ 10
～ここまでの研修を振り返って～
- ⑥ 馬にみられる病気^⑨ 12
軽種馬の生殖器系と生殖器疾患 その7
～胎盤炎・馬鼻肺炎ウイルス感染などによる流産～
- ⑦ やさしい生産育成技術 16
扶助とハミ受け
BTC 利用者向け育成技術講演会 in 浦河 2018
- ⑧ BTC からのお知らせ 18
第2回浦河高等学校写真部 BTC フォトコンテスト
- あとがき 20



Bloodhorse Training Center

公益財団法人

軽種馬育成調教センター



北海道日高振興局長

松浦 英則

これからの馬産地日高に 求められるもの

日高管内における軽種馬生産は、古くは明治時代における軍馬育成から始まり、第2次世界大戦後に競馬法が制定されて以降、高度成長や昭和45年からの米の減反政策によって軽種馬生産への転換が急激に進み、我が国最大の軽種馬供給地域として内国産競馬の発展に大きな役割を果たしてきました。

その後、昭和50年代における計画生産の実施、平成以降のバブル崩壊、外国産馬の出走機会の拡大による国際化、地方競馬の相次ぐ廃止など、多くの困難・課題を乗り越え、生産者と関係機関が一丸となって強い馬づくりに取り組んできた結果、近年では中央競馬をはじめ、ホッカイドウ競馬など地方競馬の発売額も復調し、北海道市場では平成29年の売却総額や売却率が過去最高を記録、今年も引き続き好調を維持するなど、明るい話題が多くなっているところです。

一方、全国シェア8割を占める日高管内の軽種馬生産頭数をみまると、ここ数年は5,500頭前後と横ばいで推移しているものの、10年前と比較すると9割弱まで減少、繁殖牝馬飼養戸数では700戸強と、同じく約7割に減少しており、基幹産業である軽種馬生産の減少による、関連産業を中心とした地域への影響が危惧されています。当振興局で3年に一度実施している「軽種馬経営動態調査」の平成28年度データをみまると、離農の大きな要因は高齢化・後継者問題であり、約6割以上の生産者が後継者不在、さらに、60代以上の生産者のうち約半数が近い将来に離農を検討しているなど、今後、より一層離農が加速することが想定されます。

また、繁殖牝馬飼養頭数が10頭以下の小規模な家族経営が約7割を占める日高管内では、土地条件や経営余力の問題に加え、労働力の不足により、離農跡地を集積して規模拡大を図ることが難しい場合が多く、このままでは生産頭数を維持していくことが非常に困難になってくるものと推察されます。

これらの課題に対応していくためには、競走馬生産振興

事業等を有効に活用し、これまでも取り組んできている「資質の高い馬づくり」、「優良な繁殖牝馬の導入」、「良質な自給飼料の生産」等の取り組みを、さらに高度化していくことはもちろんのこと、以下の点を地域で検討していくことが必要ではないかと考えます。

一点目は、個別完結型経営では労働力の限界があることから、草地管理作業を外部化するコントラクターや、育成部門を他牧場へ外部化する分業化の導入のほか、一部地域で導入されている軽種馬ヘルパー制度の広域実施の検討など、労働力の効率化を図ること。

二点目は、今後、多くの離農地が想定されることから、自給飼料の増産のほか、放牧地の集約・牧区の再編に必要な優遇支援策など、規模拡大を図る軽種馬生産者へ円滑な農地集積を促進することが可能な仕組みを検討すること。

三点目は、労働力不足がさらに顕著となることから、公益社団法人日本軽種馬協会や公益財団法人軽種馬育成調教センターによる研修制度に加えて、軽種馬生産牧場における従業員の育成を目的とした短期研修制度の仕組みを地域で検討することや、技術を持った離農者が他牧場で円滑に従事することへの支援策のほか、現在、国において検討されている外国人の新たな在留資格に関して、軽種馬業界としてどう活用していくか等について、早急に検討していくこと。

その他にも幾多の課題がありますが、マンパワーの不足を補完する対策が喫緊の課題であり、軽種馬の雇用や就業者の実態を踏まえ、他産業との連携を含め、地域において、労働力確保の体制づくりをスピード感を持って進める必要があると考えております。

今後とも、活力ある馬産地日高として軽種馬生産頭数を確保し、競馬事業を支えていけるよう、軽種馬生産者の皆様をはじめ、関係機関の皆様と連携しながら課題解決に取り組んで参りたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。

若馬における中手近位掌側部の傷害

軽種馬育成調教センター

業務部 診療課 診療係長

安藤 邦英

はじめに

競走を目的として調教が進められる馬にとって、骨、腱、靭帯、筋肉、蹄といった運動器のトラブルは避けられない問題です。その代表的なものに古くから深管骨瘤という病名で知られる疾患があり、これは競走用馬だけでなく乗用馬でも一般的に起こる運動器疾患のひとつです。深管骨瘤が起こるのは腕節に近い管上部の後ろ側で、馬関係者の間で「ひざうら」と呼ばれている部位にあたります。この管上部の後ろ側は中手近位掌側部（図1）とも言われ、第三中手骨（つまりは管骨）のこの部位に骨瘤を形成した病態が深管骨瘤です。しかし、この第三中手骨近位掌側部は周囲を副管骨（第二および第四中手骨）、浅屈腱、深屈腱、深屈腱の支持靭帯、繫靭帯と言った組織に囲まれた深い位置にあるため、実際に触知して骨瘤を認識することは難しく、また解剖学的な位置関係からX線検査による骨瘤の描出は困難です。そのため、深管骨瘤は、実際に骨瘤を形成しているかどうかはわからないが、中手近位掌側部に傷害が発生し、それを起因として跛行している病態の総称として用いられているのが現状です。そのため、深管骨瘤という疾患をひとまとめにくくらず、それぞれの病態をしっかりと理解することがとても重要です。それでは中手近位掌側部に傷害を起こす病態にはどのようなものがあるかについて説明します。

中手近位掌側部に傷害を起こす病態

2003年に発刊されたEquine Veterinary Educationという海外雑誌に、Dr. S. Dysonがこれらの病態についての類症鑑別を表1のように記しました。6つの病態が挙げられています。これらは大きく2つの病態に分けられます。上の1～5の病態は、繫靭帯とそれが起始する第三中手骨との付着部で起こる靭帯付着部症にあたります。それに対して6の病態は、骨単独の問題であり疲労性の骨傷害にあたります。続いてそれぞれの病態について、詳しく記述します。

表1 中手近位掌側部における疼痛の類症鑑別

1. 近位繫靭帯炎
2. 近位繫靭帯炎と贅骨形成
3. 近位繫靭帯炎と第三中手骨掌側皮質の肥厚
4. 超音波画像上異常を伴わない近位繫靭帯炎
5. 第三中手骨の繫靭帯起始部に発生した裂離骨折
6. 第三中手骨掌側皮質に発生した疲労骨折

繫靭帯と第三中手骨の付着部（繫靭帯起始部）における傷害

靭帯付着部症とは、靭帯と骨が付着している部位（付着部）に繰り返し強い牽引力が加わることで、同部に炎症が生じて痛みが起こる疾患です。これは「使いすぎ症候群（Overuse Syndrome）」の病態のひとつであり、成長途上の若い個体に起こりやすいという特徴があります。

馬における靭帯付着部症では、繫靭帯と第三中手骨の付着部がある中手近位掌側部がその好発部位となります。繫靭帯は球節を支える保定装置として大きな役割を担っており、負重がかかることで沈み込もうとする球節を保持しています。馬が走行する際は、より強い力が加わるため繫靭帯と第三中手骨の付着部では強い牽引力がかかります。日々調教が実施されている競走用馬では、反復のトレーニングにより靭帯付着部へ力学的負荷が繰り返されることで発症します。

若馬の繫靭帯起始部に起こりやすい病態の代表的なものに裂離骨折（avulsion fracture）があります。裂離骨折とは、筋・腱・靭帯などの牽引力によって付着部の骨が引き裂かれて発生する骨折のことで、ここでは繫靭帯に引っ張られ発症します。その診断にはX線検査が用いられ、確認された損傷の程度に応じて休養期間が決定され、その後は管理されたりハビリメニューが必要となります。おおまかな目安として、管骨の正面からの撮影（背掌像）でX線透過性の黒い線状陰影が確認された場合（図2左）は1ヵ月間、加えてその他の撮影方向で裂離骨折が確認された場合（図2右）は



図1 深管骨瘤が発生する中手近位掌側部

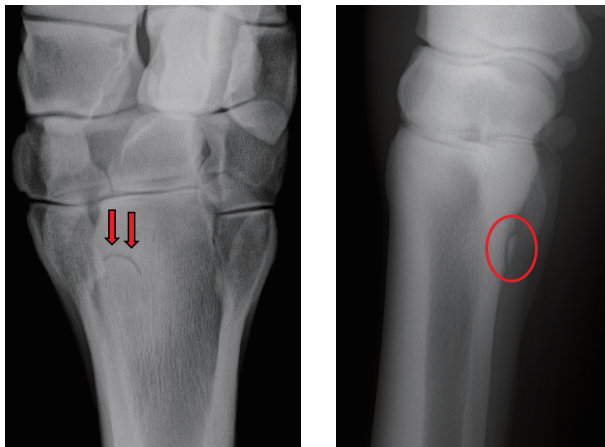


図2 左：左中手近位部のX線画像（背掌像）、第三中手骨近位部にX線透過性の陰影が観察される（矢印）右：左中手近位部のX線画像（外内像）、骨本体から骨片が離れている裂離骨折（円内）が観察される。

2ヵ月間以上の休養が必要です。一般的には、十分な休養期間を設け、段階的なりハビリメニューを実施した場合の予後は良好です。しかし、休養期間が不十分で裂離骨折が治癒しないうちに運動を再開すると、同部で癒合不全が起り、過剰な骨増生が発生し慢性跛行の原因となるため注意が必要です。

近位繫靭帯炎は繫靭帯起始部における付着部症のもうひとつの病態で、繫靭帯の起始部付近における靭帯炎のことです（図3）。靭帯炎ですので組織修復には長期間を要します。3ヵ月間の完全休養とそれに続く段階的なりハビリメニューを実施することで治癒に至りますが、付着部における裂離骨折を併発しているケースでは予後が悪いとされています。しかし、若馬では近位繫靭帯炎の発生はあまり多くありません。これには年齢が若い時期に特有の理由があります。腱や靭帯は年齢とともにその強度が弱くなりますが、若馬では柔軟性に富んでおり高い強度を持ちます。それに対して、成長期の骨は軟骨部分が多く未完成であるため、腱・靭帯と比較して弱いことが挙げられます。強い負荷がかかった際には物理的に弱い付着部の骨で傷害が起りやすいために

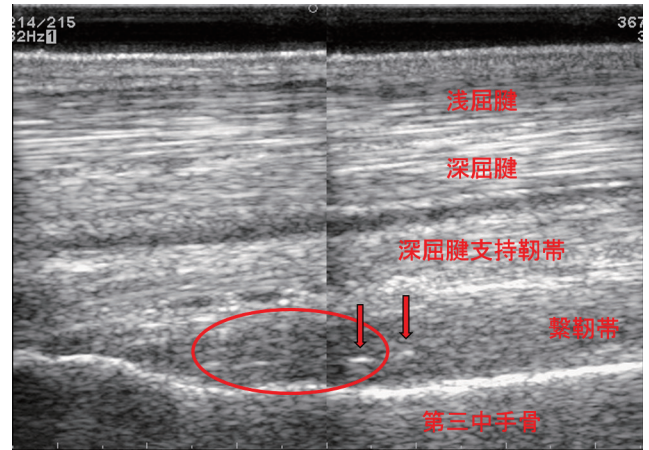


図3 近位繫靭帯炎発症馬の超音波画像（縦断像）

繫靭帯炎を示す繫靭帯のエコー輝度低下（円内）と第三中手骨からの贅骨形成と思われる高輝度エコー像（矢印）が観察される。

裂離骨折が多く、反対に靭帯炎の発生が少ないわけです。

第三中手骨近位掌側皮質の疲労骨折

これは前述の通り繫靭帯と無関係に起こる骨単独の病態です。疲労骨折とは、急激な一瞬の外力により発生する通常の骨折とは異なり、単回では骨折を生じないような小さな負荷が同一部位に繰り返し加わることで、徐々に骨組織が損壊し発生する骨折です。疲労骨折も靭帯付着部症と同様に「Overuse Syndrome」の病態のひとつであり、成長途上の個体に起こりやすいという特徴があります。

馬の疲労骨折は様々な部位で認められ、第三中手骨近位掌側皮質でも起こることが知られており、運動により同部に圧縮力がかかることで発生すると考えられています。診断にはX線検査が用いられ、第三中手骨近位内側部で縦骨折線が確認されることで判明します（図4）。ほとんどの骨折は骨の中心よりも内側で観察されます。初めて跛行が認識されたときの検査で、骨折線の周囲に既に骨硬化像が認められることもあり、外内方向でも骨硬化像は観察されます。跛行直後の検査では骨折線ははっきりせず、2週間後の再検査時に発見されることも少なくありません。そのため、初回の検査で異常がなかった場合でも2週間後に再診することが望ましく、症状が残っている場合には再度のX線検査が必要です。跛行が発見されてから1ヵ月が経過するまでは骨折線がより明瞭となる傾向がありますが、その後の検査で徐々に骨折線が不鮮明となり、発症から3ヵ月で消失するケースがほとんどです。そのため、骨折線が埋まってくる2ヵ月後から曳き運動を開始し、骨折線が消失した3ヵ月後からの騎乗運動再開が推奨されます。

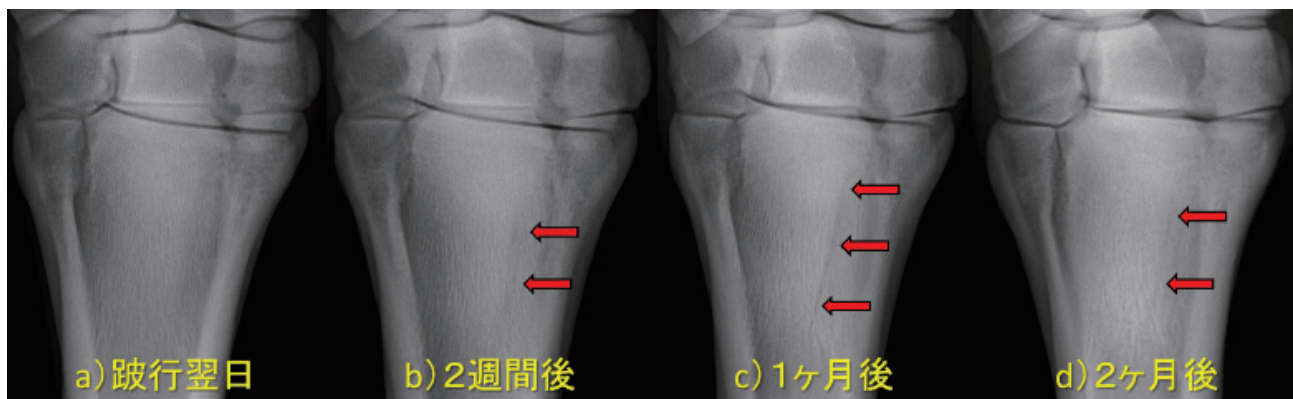


図4. 右第三中手骨近位掌側皮質の疲労骨折のX線画像（背掌像）

a) 跛行翌日の検査では骨折の診断は困難であるが、b) 2週間後に不鮮明な透過陰影が検出され、c) 1ヵ月後には明らかな骨折線が確認される。d) 2ヵ月後では修復が進み骨折線は不明瞭になってくる。3ヵ月後には骨折線が消失する症例が多い。

症状と診断方法

どちらの病態でも、急性の跛行により発見されるケースがほとんどです。跛行の程度は速歩でのみ歩様の変化が認められる比較的軽度なものから、常歩でもはっきりとした歩様の変化が観察される重度のものまで様々です。中手近位掌側部の帯熱・腫脹・触診痛がその他の症状として挙げられますが、患部はいろいろな組織によって囲まれた深い位置にあるため、これらの症状を欠くことも珍しくなく、表面化している症状が跛行のみであることが多々あります。跛行はF18～25秒程度の中等度の運動強度で発生することが多く、F15秒以上の高強度の運動で発症することは多くありません。

患部の触診により帯熱・腫脹・触診痛といった症状が観察された場合、その後は検査を行います。これらの症状を欠くことも多く、跛行しているにもかかわらず触診で異常が見つからなかった場合、BTC診療所では診断麻酔を勧めています。診断麻酔とは、神経や局所に麻酔薬を注入することで痛みが発生している部位を特定する検査のことです。BTC診療所における最近の成績では、触診で診断のつかなかった前肢跛行発症馬に診断麻酔を実施したところ、その半数近くの症例で中手近位掌側部が原因と特定されており、若馬の主要な跛行原因であることがわかりました。同部の傷害により跛行していると判明した場合、まずはX線検査を実施して骨の異常がないか確認します。その所見に応じて休養期間やリハビリメニューを決定しますが、再発症例や跛行してから長く運動が継続された症例では超音波検査を実施することもあります。海外では核シンチグラフィ、CT、MRIといった詳細な検査が行われる場合もありますが、日本国内では設備があまり整っていないために

検査を行うのは困難な状況です。

予後

若馬における中手近位掌側部の傷害の予後は、早期に診断されて十分な休養が与えられたケースでは、治癒に至り再発もなく予後は良好です。しかし、疾患に気付かず運動が続けられてしまった、休養期間が短く早期から運動が再開されて再発してしまったケースでは、跛行を繰り返す慢性跛行の状態となることがあり、回復までに長期間の休養が必要となります。特に靭帯附着部症の場合は、近位繫靭帯炎へと発展する恐れがあるため、しっかりと診断をつけ、十分な休養期間を設けることがリハビリで失敗しないためにとても重要です。

最後に

中手近位掌側部の傷害は、若馬で最も一般的な跛行原因のひとつであることから、日頃から同部に症状がないか注意深く観察することが望ましく、症状がなかったとしても跛行原因となることが多いため、常に疑ってかかる必要があります。成長途上の若馬は骨や筋肉が完成していないことから、馬の成長に応じた適切な運動負荷は本疾患の予防につながります。しかし、毎日トレーニングを積み重ねなければならぬ競走用馬において、発生をゼロにするというのは困難です。そのため、本疾患に対する正しい知識を身につけて理解を深めることは、疾患の早期発見、適切な休養期間とリハビリメニューの実現につながり、たとえ発症したとしても難治化させずに治癒させることが可能となることから、とても重要なポイントとなります。

BTC 調教場がもたらしたもの

競馬のフリーライター 山根 千治

はじめに

昨年1月、「競馬のフリーライター」の看板を掲げさせて頂いた。一昨年8月、地方スポーツ紙の「道新スポーツ」を定年退職し、自分の一番したい仕事を素直に選択した。大学卒業後、競馬専門紙「競馬研究」（現研究ニュース）に入社。その後、故郷・北海道の「北海道新聞」の競馬担当、さらに道新スポーツに転籍し、中央競馬や馬産地の情報を伝える「馬事通信」を担当した。しかし悲しいかなサラリーマンの辛さ。人事異動の壁は厚い。最後の約10年は高校野球などの一般スポーツや、プロバスケットボールのレバンガ北海道の番記者をやっていた。何も不足はなかったが、心の中には競馬への思いがくすぶっていた。「退職したら競馬をやろう」。現在は週刊競馬ブックで「北海道発!競馬の力」というタイトルでコラムを連載させて頂いている。

BTC 調教場とトレーニングセールの誕生

さて、競馬にカンバックしてから、馬産地を回っているとその変貌ぶりに驚かされることがある。そのひとつがトレーニングセールであった。私はこのトレーニングセールの原点は、日本の競走馬育成のメッカであるBTC 調教場（北海道浦河郡浦河町字西舎）にあると思っている。そしてBTC 調教場は、多くの新しい競走馬産業を生み出し、バブルと言っては大ききかもしれないがビッグビジネスにつながっていったと確信している。1997年、この地の1600m直線砂馬場で行われたJA ひだか東農協主催の「ひだかトレーニングセール」が大きな成功を収め、競走馬の流通に革命を起こした高揚感が忘れられない。私は競馬研究時代、美浦トレーニングセンター・北馬場Cコースの時計班だった経験を生かし、このトレーニングセールの時計計測のサポートをして、ホースマンたちの熱い思いを肌で感じていたのだった。

それまで日本では未発展だった育成業者が、トレーニングセールを大きな産業として成長させたのはいうまでもない。

そしてその中核となったのがBTC 調教場の施設を利用した近隣の育成牧場だった。それまで生産地では、育成業が拡大していくのがなかなか難しかった。まず個人牧場レベルではコース、厩舎など施設に大きな投資が難しかったこと、そして乗り手確保も大きな課題となっていた。BTC 調教場が一般に開放される1993年までは、大きな調教場としては日高西部地区・門別にあり1989年に開場したファンタスクラブが知られていた。しかし、静内、三石、浦河の東部地区には大きな施設がなく育成の部分でまったく発展途上だった。



BTC 調教場全景 右下は西舎共同育成場

育成業の成長

BTC 調教場が馬産地にもたらしたものは多い。まずストレートに育成業者の拡大と調教技術の進歩。利用しやすい料金で施設を開放したため多くの育成業者が集まり、競争原理が働いたことでそれぞれの技術を磨きあった。中には生産牧場が育成へ乗り出すケースもあり、育成業者の広がりが一気に加速した。また近隣の生産牧場が、育成業者の利便性を考え、遊休地に厩舎を建て、それを貸し出して賃貸料を得るなど新しい収入源が生まれた。さらに育成業者はピンフッカー（1歳馬を購入し、馴致・育成して2歳トレーニングセールで転売する業者）、コンサイナー（所有者から

馬を預託されセール用に馴致・育成する業者)としてビッグビジネスにつなげていった。

その一番の成功例は吉澤克己さんが代表を務める吉澤ステーブルだろう。1996年BTC調教場の至近距離にあった貸し厩舎に入り事業をスタート。現在、育成業としても、ピンフッカーとしても業界トップに上り詰めたといっている。このBTC調教場をひとつの拠点として現在は、茨城県、滋賀県にも分場をかまえ総馬房数は「486」にのぼる(同ステーブルHPより)。また今年の「北海道トレーニングセール」では前年のオータムセールで702万円だった「ブラックカシ米尔16」を最高価格の4860万円で売却。大商いを成立させている。吉澤代表は札幌市出身で、馬に関わりがないサラリーマン家庭の生まれ。高校、大学と馬術部に所属して馬の世界に入り、わずかに約20年で業界トップに駆け上がったシンデレラボーイである。吉澤さんが成功した理由は、馬産地で遅れていた営業力に長けていたことだろう。ある意味、彼の発信力が、千歳空港から3時間はかかるBTC調教場に多くの馬主、調教師を呼び込み、この地の育成レベルの高さをPRすることにつながったといっても言い過ぎではないと思っている。



吉澤ステーブル売却・「ブラックカシ米尔16」

トレーニングセールの成長

さて私を驚かせたトレーニングセールだが歴史的に見れば、まず注目が集まったのが1990年代前半、ヒシマサルなど海外のトレーニングセールで購買された競走馬の活躍にあった。一方、日本国内ではバブル崩壊後、競走馬の売上げが低迷。生産地では1歳でなかなか買い手のつかなかった馬に、調教済みという付加価値を付けて“即戦力”を提供することで、競走馬流通に新たな販路を開拓することを目指した。本格的なトレーニングセールが開催された1997年に

は「ひだかトレーニングセール」のほか、「プレミアトレーニングセール」「サンエイトトレーニングセール」「北海道トレーニングセール」の4セールが開催された。この4つのトレーニングセールの総売上げは約8億円だった。その後、北海道内で行われるトレーニングセールは淘汰、連合などにより現在、日高軽種馬農協が開催し、札幌競馬場で行われる「北海道トレーニングセール」に一本化された。

そして今年、久しぶりにその「北海道トレーニングセール」取材して、大きな驚きと深い感慨が心の中に湧き上がってきたのであった。151頭を売却し、総売上げ11億6985万6000円という大きな数字に成長を果たしていた。しかもその調教技術の進化には目を見張るものがあった。さらに現在、今年の国内のトレーニングセールでは「九州トレーニングセール」が2786万4000円、「JRA ブリーズアップセール」が6億4314万円、「千葉サラブレッドセール・2歳トレーニングセール」が8億427万6000円を売上げ、この4セールの合計すると26億円を超える巨大マーケットを形成するまでになっていた。



2018年北海道トレーニングセール：札幌競馬場

「世界に通用する強い馬づくり」を目指して

今年4月、BTC調教場の記念すべきニュースが伝わってきた。利用延べ頭数が300万頭に到達したという。「世界に通用する強い馬づくり」を目指し、1993年10月に開場。施設としては屋内1000m直線ウッドチップ馬場、屋内600mトラック砂馬場、1600m・1200m直線砂馬場、グラス馬場、グラス坂路馬場でスタート。その後、800mトラック砂馬場、グラス坂路馬場芝2400m、1600mトラック砂馬場、屋内700m坂路ウッドチップ馬場(後に1000mに延長)、直線2000m芝馬場など着実な進化を見せている。1日の最多利用数は2011年5月3日の787頭。JRAでの勝利数は約1万5000勝。

今年のGI皐月賞を制したエポカドーロや安田記念を制したモズアスコットもこの地で育成された。

一方で、BTC 調教場を取り巻く環境の中で、課題が顕在化している部分もある。ひとつは冬期間の運用である。2歳馬の育成や現役競走馬の調整などを、北海道より温暖で仕上げやすい美浦、栗東の近くの育成牧場で行うことが増えているという。さらに、これは日本のすべての業界に言えることだが、労働力不足の問題だ。確かにプライベートの時間を大切にする現代の若者気質を考えれば、馬産地の仕事、しかも厳寒の北海道の労働環境は厳しい。私が今年、取材してきた中で本当に“びっくり”したのが、この地で働くインド人騎乗者の多さであったかもしれない。

何があったとしても BTC 調教場が、日本においてもっとも充実した育成場であることは論を待たない。時代の要求で、ひとつの産業が変化していくのは当然のことである。それが前向きな発展につながることを願っているのは私だけではないだろう。

(寄稿日 平成30年10月)



BTC 調教場の施設：1600 mトラック砂馬場（上）、屋内1000 m坂路ウッドチップ馬場（下）

シュウジデイファーム

<http://shujidayfarm.com/>

～ 安田記念 (G I) 優勝馬 モズアスコット号の育成調教牧場 ～

第68回安田記念 (G I) 優勝馬モズアスコット号の育成調教を行ったシュウジデイファームの石川秀守社長に調教方針やモズアスコット号の育成時代のお話などを伺いました。



小誌) モズアスコット号でシュウジデイファームとしては初めての G I 制覇となりました。モズアスコット号の育成時代はどのような印象でしたか？

社長) 馬主さんがキーンランドセプテンバーセールで購入され、牧場には1歳の11月に入厩してきました。父が Frankel、母 India も走った血統なので期待はありました。育成時代は大人しく扱いやすかったですね。牡馬ですが、特に悪さをするわけでもなく、普段は闘志を表には出さず、走ったら動きが良く、楽に動いていました。今日は軽めにと考えていてもスピードが出てしまうので、調教はやりすぎないように注意していました。

小誌) 育成時代に特に印象に残ったことはありますか？



始終にこやかに取材に応じて頂いた石川秀守社長。この笑顔も魅力の一つだ。

社長) 2歳の7月頃まで順調にトレーニングできたのですが、前肢の球節がわずかに腫れてきたため、BTC 診療所で精密検査してもらって種子骨炎が判明しました。秋にはデビューできるかなと思っていただけに残念でしたが、今から思えば診療所のアドバイス通りここで無理せず、ゆっくり休養したことで馬体の成長につながり、いい結果になったのかなと思います。

小誌) 牧場の育成方針などありましたらお願いします。

社長) 馬が帰ってくる馬づくりと言いますか、育成時代を担当して終わりではなく、競走馬となってからも安心して預けてもらえるように信頼関係を大切にしたいと考えています。なるべく期待にこたえられるようにいい状態で馬を送り出すことはもちろんですが、例えば、馬の報告書もより正確に、自分が見ていてまだ足りないと思うことや必要と思われることも書き込んだりしています。また、競走馬という性質上難しいですが、なるべく誰にでも騎乗できる馬づくりと競馬場により近い運動量を目指しています。

小誌) 確かに休養馬も多い印象がありますね。

社長) BTC には多くの施設があり、馬の状態によって最適な馬場を選ぶことができます。また、育成初期はもちろんですが、調教師の先生の求めに応じて競馬に直結する高いレベルの調教ができる施設です。この施設がなければこのような馬づくりはできません。こ



競馬場とほぼ同じスケールの 1600 m トラック砂馬場での調教風景。先頭はモズアスコット号。騎乗者は岸本洋明場長。

これらの施設を最大限に生かすことを考えて調教を組み立てています。例えば1600mトラック砂馬場は、競馬場とほぼ同じ大きさで、実践的なトレーニングが行えるので気に入ってよく使っています。また、屋内600mトラック砂馬場や1600mトラックである程度のキャンターを行って体を温めた後に、今年からより負担のかかる馬場に整備された屋内1000m坂路ウッドチップ馬場で追い切るといった場合もあります。

小誌) BTC 調教場の利用方法で工夫されていることはありますか？

社長) 調教場を最大限に生かす工夫の一つとしてゲート馴致があります。ゲート試験はなるべく1回で合格することを目指して調教しています。JRAの夏の北海道シリーズで、直接入厩して新馬戦に出走する馬は、出走の15日前には競馬場に入厩する必要があり、入厩後すぐにゲート試験に合格しないと出走に間に合いません。しかし、BTCの施設を利用すれば、十分なゲート練習・トレセンと同様に高度な調教を行うことができます。



ゲート練習中の風景。より競馬場に近い調教を実施するためゲート馴致は入念に実施している。

例えば2016年の函館2歳ステークスで優勝したレヴァンテライオン号は、新馬戦、2戦目の函館2歳ステークス共に、牧場から直接入厩の形で出走し、幸い2戦とも勝つことができました。このような競馬の仕方もBTCの施設があればこそできるものと思います。

小誌) なるほど。BTC 調教場を最大限に生かす工夫はその他にありますか？

社長) はい、施設ではありませんが、BTCでは1年間の育成調教技術者研修の他に、牧場スタッフ向けに1ヵ月間の短期講習を実施していますよね。うちにはこの短期講習会から馬に騎乗し始めたスタッフが二人

います。講習会は平成23年、平成24年の2月に1名ずつ受講しました。二人とも全く騎乗経験がなく牧場に就職したのですが、ちょうどBTCで初心者向けの1ヵ月間の短期講習を行うと聞いて応募しました（※現在は9月に騎乗未経験者、10月に騎乗経験者向けに各4週間実施）。BTCの短期講習で基本を学んだ後、なるべく馬に騎乗できるように配慮しましたが、本人たちの意識が高く、とても努力してくれたおかげで現在では中堅どころとして頑張ってくれています。



モズアスコット号に勝利したこともあるダイメイフジ号に騎乗する橋本健治さん（左）とゲート練習のため騎乗する桑名大壺さん（右）。「BTC短期講習会で厩舎作業や騎乗技術の基本を学ぶことができ本当に良かった、今の仕事の基本になっています。」と語ってくれました。

小誌) なるほど、シュウジデイファームは、ハード・ソフトの両面でBTC調教場を有効に活用されているのですね。最後にモズアスコット号の近況についてお願いします。

社長) 現在、モズアスコット号は秋に向けて順調にトレーニングを進めています。今秋には再び活躍してくれるものとスタッフ一同期待しています。

小誌) 今日はお忙しい中、お時間を頂きどうもありがとうございました。（取材：平成30年9月末日）



シュウジデイファームで休養中のモズアスコット号と牧場スタッフ。左端は石川社長。

充実した研修生活

第36期 浅尾 菜津子

私は将来、馬関係の仕事をしたと思っていました。しかし、牧場で働いた経験がなく、技術も作業のスキルもありませんでした。そのため馬関係の仕事始める前に、馬に乗る技術や馬の世話について学ぶため、インターネットなどを使って調べてBTC研修のを知り、今、36期生として研修を受けています。



研修は、5時15分の集合から始まります。私は、遅刻したくないのと、しっかりと目を覚ましてから作業に取り掛かりたいので、4時前後に起床します。それから朝作業をして7時頃に朝食、再度集合して1日に1鞍か2鞍騎乗訓練をします。これらの騎乗馬は教官が決めます。前に行きたがる馬や、のんびりしている馬、調子に乗って暴れる馬、怖がり

で何にでも驚く馬など色々な馬がいて、その馬に合った乗り方をして、自分達の騎乗技術を上げるために頑張っています。

午後は馬に関係する学科を受けます。科目ごとに試験があって、80点以上が合格のため勉強もします。その後厩舎へ行き、馬の手入れや飼い付け、掃除などをして、体力づくりのランニングをして終了です。交代で夜の飼い付けがあるので、18時45分に集合して作業します。

入講してすぐは、早起きや馬にも慣れていなくて大変でしたが、今は時間や規則、そして馬にも慣れてきました。規則に違反したり遅刻するとペナルティがあり騎乗訓練に参加できなくなるので、1鞍でも乗鞍を減らさずに、これからも毎日頑張って騎乗技術を向上させられるようにしたいです。



日々感じる技術の向上

第36期 上原 夏実

BTC研修に来るまでは、殆ど馬との関わりがなかった研修生も多く、ここで一から馬のことを学びました。4月の2週目までは35期の先輩に助けをもらいながら馬の手入れなどを行い、最初の騎乗訓練は覆馬場から始まりました。安全性を保つため、馬と馬との距離を3馬身取るのですが、3馬身がどのくらいの距離なのか感覚をつかむのが難しく、全員が同じ距離を取れるようになるまで時間がかかりました。6月、覆馬場で慣れてくると屋外の角馬場でも騎乗するようになりました。角馬場に出たばかりの頃は、馬が物見をして予想しなかったタイミングで急な動きをして落馬したり、放馬に驚いて他の人も落馬したりと角馬場で乗るたびに緊張していました。今では走路で併走やBTC調教場で騎乗できるようになり、最近はゲート練習も行いました。

9月にはJRAの馴致実習に行き、初めて1歳馬に触れました。私は、ウラ掘りや体温測定などをさせてもらい、1度だけ引いてもらいながら馬に乗りました。

10月は5日間、民間牧場の実習に行きました。牧場では、現役の競走馬や競走馬になる前の2歳馬のシャワーや手入れなどをしました。普段手入れをしている教育用馬よりも手触りが良かったです。競走馬はうるさいイメージがありましたが、まったくそんなことはなく、大人しくてかわいかったです。

研修も後半になり、JRA育成馬の騎乗が始まり、より実践的な内容になります。今後は馬に関わることや寮生活をしっかりやって卒業したいと思います。



早いもので、4月の入講から半年が経過し、ここまであっという間だったのが正直な感想です。今では、入講した頃、覆馬場での訓練で1頭の馬に2人で交代しながら騎乗していたのが懐かしく思えます。

上半期には、山菜採りから始まり、牧場見学やトレーニングセール、サマーセールなどのセリ見学など色々な課外活動がありました。一番印象に残っているのはJRA札幌競馬場見学です。装鞍所では、馬体重の計測から馬体重発表までの過程を見学し、検量室ではレース後の検量を目の前で見ることができました。また、ゲート裏で発走の瞬間を見たり、レースの合間を縫って、ジョッキーの方々と写真を撮らせていただいたりと、とても貴重な体験をすることができました。

肝心の騎乗訓練では、1つのことに集中すると、他方が疎かになることが多く、今後は克服しなければならないと思っています。また、上半期は電動木馬の練習時間が少なかったため、少しでも上手くなるために乗る時間を増やしていきたいです。

下半期には、いよいよ就職活動も始まり、馬の世界で働くことが現実味を帯びてきます。下半期も、上半期以上に短く感じると思うので、働いてから『研修時代にもっとこうしていればよかった』と後悔をしないように、気を引き締めて残りの研修生活を頑張ります。



4月からの研修生募集中

応募締切1月15日(火)必着

詳細は「**btc 研修応募**」で検索!

軽種馬育成調教センター(BTC)は、競馬にデビューする前の若馬を育成するための騎乗技術や、育成技術を学ぶ研修を北海道で行っています。壮大なスケールのBTC調教場を使用した、他にはない騎乗指導を行い、初心者でも十分な技術を習得する事が出来ます。JRA日本中央競馬会からの全面バックアップを受けているため、授業料は無料です。*ただし、食費等の自己負担はあります。研修期間は4月から1年間です。



公益財団法人軽種馬育成調教センター

馬が好きだから、できること

軽種馬の生殖器系と生殖器疾患 その7

～胎盤炎・馬鼻肺炎ウイルス感染などによる流産～

帯広畜産大学

グローバルアグロメディシン研究センター
(兼)臨床獣医学分野産業動物獣医療系

教授

南保 泰雄

様々な原因による流産

流産の原因として、臍帯捻転、双子、馬鼻肺炎ウイルス(図1)、馬パラチフスやレストスピラ、ストレス、出血、栄養不良などが考えられる。また、環境中に常在している連鎖球菌や大腸菌による胎盤炎、アスペルギルスやカンジダなどの真菌による胎盤炎の他、原因が不明な流産も多い。馬が流産すると生産者にとって経済的、精神的な痛手となるが、中でも伝染性流産の発生は牧場経営を左右する大きな問題である。

非感染性流産

感染以外の原因による流産は、原因により病態も異なるが、臍帯捻転(図2)、双胎が多い。その他にも、子宮捻転、胎子循環障害、奇形、脈絡膜絨毛の低形成など、多種多様な要因からなるが、いまだ原因不明で流産する例も25%以上を占める。

臍帯捻転は妊娠5-10ヵ月に起こりやすく、先天的に臍帯が長いと起こりやすいことが報告されている。臍帯捻転の生前診断や有効な外科的治療法の確立が待たれるところである。

双胎では、陰門からの粘液排出、乳房腫脹等が認められ、一方の胎子が発育不良胎子となり、両胎子がともに流産する。



図1 馬鼻肺炎ウイルス感染により流産した胎子
(馬臨床学より引用)

細菌・真菌感染による流産

細菌、真菌の子宮、胎盤への感染によって引き起こされる流産で、徐々に症状が進行し、最終的に流産、死産に至ることが多い。細菌・真菌感染によって胎盤炎が起こり、妊娠維持を困難にさせるためである。いずれの細菌性流産に対しても効果的なワクチンは開発されていない。

膣からの菌の侵入による胎盤炎の主な原因菌は、レンサ球菌、大腸菌などであり、アスペルギルスによる真菌性流産も確認されている。その他、馬伝染性子宮炎(CEM)の原因菌であるタイロレラ エクイジェニタリス、馬パラチフスのサルモネラ アボルタスエクイは伝染力が強く、不受胎、流産を引き起こす。海外では、ノカルジア胎盤炎やレプトスピラによる流産の発生が知られており、日本での発生が危惧されている。

一般的に胎盤の子宮頸管に隣接する部位を中心に上向性胎盤炎を発症する。膣からの悪露排出が見られることが多く、分娩徴候である乳房腫脹、漏乳が見られる。また、子宮胎盤から分泌される血中プロゲステロン(5 α -プレグ

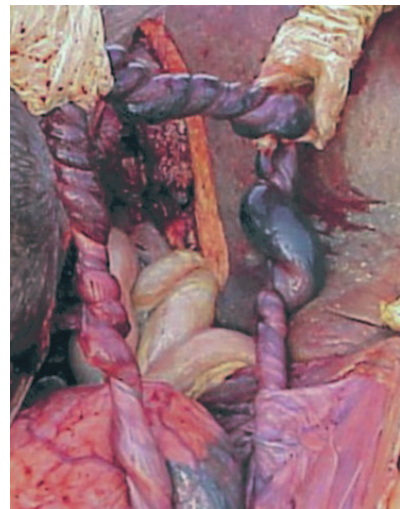


図2 非常に長い臍帯と多重に捻転し、うっ血している臍帯
(Equine Reproduction, second edition より引用)

ナン) 濃度が早期に上昇するため、流産しやすい状態を診断することができる。また、胎盤炎は一般的に妊娠後期に起こりやすい。胎子は、流産、死産に至るが、生子であっても、低体重新生子として出生し、新生子適応障害症候群(ダミーフォール)を発症するリスクが高くなる。

馬鼻肺炎ウイルス流産

馬の流産を引き起こすウイルスは海外では幾つかあるが、国内におけるウイルス性流産は、全て馬鼻肺炎ウイルスによるものである。馬鼻肺炎は、ウマヘルペスウイルス1型あるいは4型による呼吸器疾患である。症状は発熱、鼻漏などを呈する感冒であり、さらに重度となると、歩様異常、起立不能、尿失禁などを呈する神経麻痺および妊娠馬の流産を引き起こす疾患であり、届出伝染病に指定されている。原因ウイルスは、馬鼻肺炎ウイルス(Equine Rhinopneumonitis Virus、以下 ERV)とも呼ばれる。一度感染すると、馬の体内に一生潜伏し、免疫が低下するような状況で突然再活性化し、呼吸器症状(鼻漏)や流産を引き起こす。妊娠馬では妊娠後期に突発的な流産がみられ、胎子、胎盤、羊水に含まれる大量のウイルスが強力な伝染力の引き金となって多くの続発流産を招くことから、競走馬生産者にとっては生産性を著しく低下させる恐ろしい疾患として知られている。

ERVに感染すると、生涯にわたって、その馬のリンパ節や三叉神経節などに潜伏し、輸送、寒さなどのストレス、免疫低下が引きがねとなって、再活性化がおこることから、ERVの撲滅は困難であると言われている。日高管内では、過去50年間にわたり毎年20頭前後の発生がある。

馬鼻肺炎ウイルスの感染経路

馬鼻肺炎の感染は、育成馬や牧場に上がってきた引退競走馬から繁殖牝馬に感染すると考えるのが一般的な経路と考えられる。ウイルスは馬の呼吸や咳とともに空気中に排出され、接触感染ばかりでなく飛沫感染する。また、衣類や手袋、鼻捻子などに付着した鼻汁から人を介して感染する。

ひとたび馬鼻肺炎による流産が発生した場合は、胎子、胎盤、羊水に大量のウイルスが含まれており、飼養者が気付かずに、ウイルスで汚染された寝藁やきゅう舎器具、人の衣類、靴、手袋によって感染する。羊水は広範囲にわたり強力な感染源となる。日高家畜保健衛生所の調べによれば、

流産した馬のきゅう舎内での位置は、対面あるいは隣接する馬房に飼養されることが多く(図3)、抗体価が上昇している馬も散見されており、最初の流産時にすでに育成馬間、繁殖牝馬間で感染していることが示唆されている。したがって、流産発生時からの適切な対応が必要とされる。

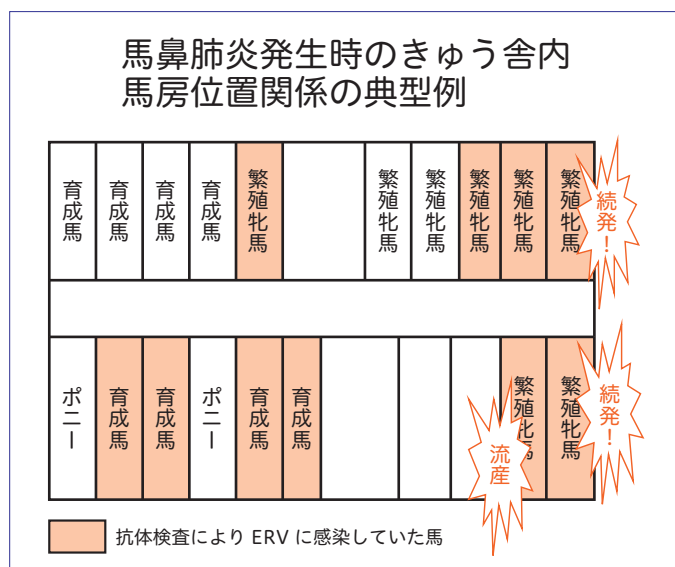


図3 馬鼻肺炎ウイルス流産馬の典型的な馬房の位置関係 (日高家畜保健衛生所の発表をもとに改変)

馬鼻肺炎ウイルス流産の予防方法

a) 予防接種

妊娠末期の馬鼻肺炎ワクチン接種は必要な予防措置である。不活化ワクチンから最初の1回目接種を妊娠6~7ヵ月、2回目を妊娠7~8ヵ月目とし、以後は出産まで、毎月接種するプログラムが推奨される。妊娠馬のみならず牧場で管理している他の同居馬(育成馬、空胎馬、乗馬、あて馬など)にも接種することで、牧場の馬群全体の免疫を上昇させることが可能となるため効果的である。

ERVに対するワクチンは、従来の不活化ワクチンに加え新たに生ワクチン「エクエヌテクトERP」が開発され、2015年から販売されている。生ワクチンは免疫増強作用が高いとされているため、生産界でもより有効な流産予防として注目されている。また、本年より、妊娠馬の異常産(流産、妊娠中の胎子死亡又は生後直死)の抑制に関する効能が追加された。

b) 馬の飼養管理上の注意点

- 育成馬や上がり馬と妊娠馬を同居させない。育成きゅう舎から繁殖きゅう舎に馬を移動する際は、妊娠馬と接触しないように適切な処置をとる。



図4 インターネットで取得可能な馬鼻肺炎予防のための説明パンフレット（中央畜産会）

- 妊娠馬にストレスをかけないよう、日ごろから健康状態を検査する。また定期的に削蹄を実施し、護蹄に努める。放牧時間、放牧条件、寒冷ストレスへの対応、馬服、ウォーキングマシンなど飼養管理について、防疫上最適なルールを決める。
- 繁殖牝馬の検温、鼻汁の有無について日々確認する。
- 妊娠馬のきゅう舎に入る際は、靴の消毒を徹底する。
- 妊娠馬のきゅう舎に入る際は、専用の長手袋をつける。長手袋は定期的に消毒する。
- 妊娠馬のきゅう舎に入る際は、育成馬の鼻汁が接した箇所がないか確認する。
- 他の牧場へ行った際は、靴および衣類の汚染が当牧場に侵入しないように徹底する。

馬パラチフス流産

馬パラチフス症は、サルモネラ アボルトスエクイというサルモネラ菌の感染によって妊娠馬では伝染性流産、種牡馬では精巣炎、化膿性疾患などの臨床症状を起こす馬特有の

伝染病で、わが国では届出伝染病に指定されている。かつて、わが国の軍用馬の間でしばしば馬パラチフスによる関節炎の集団発生がみられた。馬の疾病として重要な感染症で現在では少なくなったものの散発的に流産の発生が報告されている。

本菌は流産胎子や悪露で汚染された飼料や水を食べたり飲んだりすることで、主に消化管から感染する。また、キツネやカラスが病原菌を媒介している可能性も高い。本症の予防には感染の拡大防止と保菌馬の摘発が重要であり、ひとたび保菌馬となると病原体の飛散により保菌馬の摘発が容易でなくなるため淘汰を実施することが推奨される。

流産が発生したら

流産発生時には、その原因が ERV や馬パラチフスによる可能性があることを念頭におき、疑われる疾病が陰性であることが判明するまでは、以下のような対応が有効である。

1. 伝染性の流産では流産胎子、胎盤、羊水に大量の病原体が含まれている。まず、流産胎子、胎盤、流産場所（馬房、飼料桶、水桶など）をしっかりと消毒する。
2. 流産馬の汚れた部分は逆性石鹼、塩素系消毒剤などの刺激性の少ない消毒薬で消毒する。
3. 流産馬は隔離馬房に移動させる（必ず消毒後に移動させる）。
4. 流産胎子、胎盤をビニール袋や蓋つきポリバケツなどで密封し、獣医師の指示に従い、速やかに家畜保健衛生所に搬入する。搬入するまでは野生動物が侵入できない場所に保管する。
5. 検査結果がでるまで、除去した寝わらを無理に移動しない。



BTC 調教場

（浦河高校写真部 BTC フォトコンテスト用撮影）



どこまでも
（写真：三好 凌太郎）



はい、チーズ
（写真：成田 夢月）



間近で
（写真：向田 紗来）

扶助とハミ受け

BTC 利用者向け育成技術講演会 in 浦河 2018

BTC 業務部 次長 中込 治

平成30年度のBTC利用者向け育成技術講演会 in 浦河が、9月4日（火）午後6時から、JRA日高育成牧場乗馬センター覆馬場で実施されました。今回は、平成28年度の「サラブレッドのハミ受け」、平成29年度の「正しい騎乗姿勢」に続く第3弾として、「扶助とハミ受け」について、BTC業務部次長の中込治が実馬を使用した講習会を実施しましたのでその内容を紹介します。

正しい騎乗姿勢

まずは正しい騎乗姿勢について復習します。正しい騎乗姿勢は、正しい鐙の位置が重要になります。正しい鐙の位置は、鐙革託環（あぶみがわたっかん）の真下に鐙が位置するようにし、鐙革が地面に対して垂直であることが望ましいとされています（図1）。脚を後ろに引いてしまうと、重心が前に移動して拳で馬の頸に頼るようになりバランスがとれなくなります。逆に脚を前方へ出してしまうと、騎乗者の重心が後傾して、手綱を引いてバランスをとることになり、馬の口に悪い影響を与えてしまいます。馬が暴れたり、早く走りだしてしまった時には脚が前に出ることもありますが、馬が前進氣勢を保ち走っている場合には鐙の位置は上記の正しい位置にあることが望まれます。



図1 正しい鐙の位置

次に手綱の長さですが、何センチが良いという規定はなく、馬の体型に合わせる必要があります。騎乗者を横から見て、「ハミ→拳→肘」が真直ぐ一直線上にある拳が正しい位置になります。また前傾姿勢にした時、「肩→肘」が地面に対して垂直であるように手綱の長さを調整するのが望まれます（図2）。肘の向きについては、肘のとがっている部分が横を向かないようにし、下に向けることで拳の前後や上下の動きを助長させて、軽速歩の時に拳が上下する事を防ぐことができます。

扶助

扶助には、主扶助と副扶助の2種類があります。

主扶助は、騎座・脚・拳で騎乗者の意思を馬に伝え、馬を騎乗者の思い通りに動かす方法や手段を主扶助で行います。

副扶助は、鞭・音声（舌鼓）があり、これらを副扶助といえます。

これらの扶助は、馬の性格や調教進度によって、扶助の方法や強弱を変えて使わなければなりません。また、このような扶助を馬が理解していなければなりません。



図2 基本的な手綱の長さ

ハミ受け

ハミ受けは、馬に前進氣勢が出て、鼻前が前に出ていくとする時に少しハミを抑えるようにします。鼻前が出ていくのが少し落ち着いたら、ハミを緩めます。これを騎乗している間、何回も行います。こうすることで馬のハミ受けが出てくるようになります。円を描くように常歩を行い、馬の首を左右に曲げて行くとハミ受けしやすくなります。BTCの屋内1000m直線ウッドチップ馬場横の逍遥馬道でスラロームをするとハミ受けの練習にちょうど良いと思います。

半減脚

半減脚は、馬の意識を騎乗者に向け、馬にバランスの改善やバランス移動の準備をさせます。半減脚を実施する時には、馬に何を要求するか、あるいは、馬がどの程度扶助に対して反応するかによって扶助の強弱を使い分ける必要があります。

前傾姿勢での半減脚は、前傾姿勢を保ったまま脚で前進氣勢を出し、若干身体を起こし、一瞬手綱を緊張させ、馬のバランスが起きてハミに対して譲った状態にさせます。こ

の時に後躯が入ってくる（下がる）ようになることが重要です（図4）。これを1回の調教中に何回も繰り返して使用することにより、ハミにもたれかかることを改善させる方法の一つになります。

騎乗クリニック

騎乗クリニックは、参加者の中からクリニックを希望する15名の方を3班に分けて行いました。騎乗者に対しては、それぞれ常歩、速歩、駈歩を行いながら、姿勢や足の位置、手綱の長さ、拳の位置、肘の向き、肩と肘の位置、股関節や膝関節の力の入れ具合などを指摘しました。

参加者からは、「指導されたとおりに騎乗してみるととても楽に騎乗できた」、「早速明日から試してみたい」、「今まで気が付かなかったところを指摘してもらえ、参加してよかった」、「指導が的確で、牧場へ訪問して騎乗者全員の指導をしてほしい」など大変好評でした。今回の講習会が、みなさんの育成調教技術向上の一助となれば幸いです。（サラブレッドのハミ受け、正しい騎乗姿勢については、それぞれBTCニュース106号、110号に詳細な説明がありますので参考にしてください。）



図3 中込次長による半減脚の実演



図4 半減脚：騎乗者が脚で馬を前に出し、後躯を踏み込ませて、前躯を上げるようにする



図5・6 騎乗クリニックに参加していただいた参加者の皆さんとクリニック中の中込次長

第2回浦河高等学校写真部BTCフォトコンテスト

軽種馬育成調教センター 総務部 土田 隼平

当センターでは、一昨年より、浦河高等学校写真部の皆さんによるフォトコンテストを開催しており、昨年も第2回目を行いました。

写真部員は総勢27名で、新たに加わった1年生13名の中には、初めてBTC調教場を訪れた人もおり、広大な調教場の風景にとっても驚いていました。

昨年の写真部の主な大会成績を紹介しますと、10月に行われた全道高等学校写真展・研究大会では、入選が1作品、佳作が4作品という素晴らしい成績を収められました。入選作品は全国推薦作品に選出され、今年の7月に佐賀県で開催される全国高等学校総合文化祭の写真部門に出品されます。

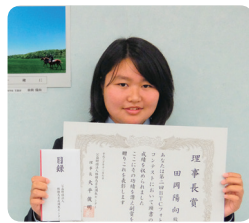
今回の撮影は5～9月の土曜日や祝日、夏休みを利用して計8回行われました。BTC調教場利用牧場の皆様のご協

力のもと、各施設での調教風景やBTC研修生の騎乗訓練・厩舎作業などを撮影し、1人1人個性豊かな作品に仕上げていただきました。役職員49名での投票の結果、以下のとおり受賞作品が決まりましたのでご紹介させていただきます。

コンテストに参加していただいた写真部の皆様、また、大変お忙しい中、撮影にご協力いただいたBTC調教場利用者の皆様には、この場をお借りして御礼申し上げます。今回のコンテストを通して撮影された写真は、今後のBTCのPR等に使用させていただきます。また、今回のコンテスト応募作品は、本号P14および次号以降でご紹介させていただきます。

最後に、今年も第3回目を開催する予定ですので、写真部の皆さん1人1人が昨年を超える作品を撮影できることを期待しております。

【理事長賞】



作品名「一緒に」 撮影者：田岡 陽向 さん

「写真部に入部し、初めて賞を取ることができてとても嬉しい。この写真は広大な自然の中で一緒に頑張れる仲間がいるのが良いと思い選びました。来年は走っている馬の姿を撮りたいです。」

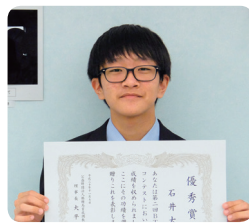
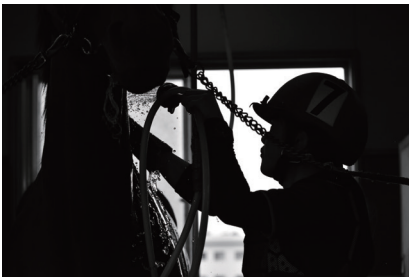
【優秀賞】



作品名「修行」 撮影者：細川 将大 さん

「見栄えが良く、右側から人類の進化のような構図になっているのが良いと思い選びました。来年は和気あいあいとした和やかな写真が撮りたいです。」

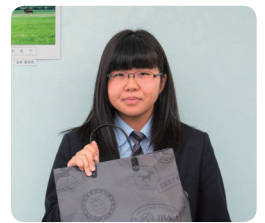
【優秀賞】



作品名「向き合って」 撮影者：石井 大梧 さん

「馬の顔が洗い手の方を向いた時に撮影した写真で、馬と人が心から向き合っていると感じこの写真を選びました。来年は疾走感あふれる写真を撮りたいです。」

【特別賞：日本中央競馬会 日高育成牧場長賞】



作品名「野原の元で」 撮影者：白井彩矢花さん

「広大な自然の中を馬が歩いているところが良いと思い選びました。来年は馬が力強く走っているところを撮りたいです。」

あ・と・が・き

- ★寒さも一段と厳しさを増す中、平成最後となる年が明けました。BTC 調教場では若馬の調教も春に向けて順調に進められており、本年も中央競馬等において利用馬の活躍が待たれるところです。昨年の中央競馬での主な成績は、皐月賞をエポカドーロ号（吉澤ステーブル）が優勝し、日本ダービーにおいても僅差の2着となりました。また、安田記念ではモズアスコット号（シュウジテイファーム）が優勝し、中央 G I 2勝、G II 3勝、G III 10勝（12月2日現在）となりました。優勝された関係者の皆様、本当におめでとうございました。本年も皆様方の強い馬づくりをサポートする調教場として、より良い管理等に務めて参りますので、どうぞよろしくお願いたします。（H.K）
- ★BTC 育成調教技術者養成研修 36 期生は、10月初旬、BTC 近隣にて牧場実習を行い、それまでの JRA 日高育成牧場での馴致実習の経験を活かしながら、牧場の仕事を体験することができました。また、JRA 育成馬の騎乗実習では、自分たちが鞍付けした若駒の調教が始まりました。11月になると門別競馬場でのナイター競馬を見学し、11月下旬からは、今後の就職活動の大きな起点となる牧場説明会が実施され、生徒たちは牧場ごとの業務方針、施設面、福利厚生面等を熱心に質問していました。牧場実習と牧場説明会にご協力頂きました牧場の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。（O.N）
- ★平成 30 年 9 月 26 日～27 日、北海道大学で行われた日本産業動物獣医学会 北海道地区学会で、当センター診療係 多田健一郎獣医師が発表した演題「診断麻酔を用いたサラブレッド種後期育成馬の跛行診断に関する回顧的調査」が、「北海道地区学会賞」に選出されました。2歳育成馬の跛行について、診断麻酔を用いてその原因を明らかにしたことが高く評価されたものです。今後は、平成 31 年 2 月 8 日～10 日に開催される、平成 30 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会（神奈川）にて受賞講演を行う予定となっています。
- ★今回の「た・ず・な」は、北海道日高振興局の松浦英則局長に、日高の現状と今後の課題についてご執筆頂きました。皆様の今後の業務の参考にしていただければ幸いです。さて、昨年の北海道は、初夏の低温・長雨、台風、地震など自然災害が相次ぎ、BTC でもその対応に翻弄され、災害についてとても考えさせられる 1 年でした。今年こそは、平穏で好天に恵まれ、皆様にとって実り多き良き一年となりますよう、心からお祈り申し上げます。（M.K）

BTC ニュース 2019 年 第 114 号

※ BTC ニュースに関するお問い合わせは、下記の電話で受け付けております。

発行日：平成 31 年 1 月 1 日

発行：公益財団法人 軽種馬育成調教センター TEL **0146 (28) 1001** (代) FAX 0146 (28) 1003
〒057-0171 北海道浦河郡浦河町字西舎 528 ●ホームページ <http://www.b-t-c.or.jp>

編集責任者：白木 正明 編集：小林 光紀

制作・印刷：西谷印刷株式会社 〒135-0022 東京都江東区三好 2-1-4